

ガーナにおける人づくり野球を通じた非認知能力向上プログラムの教育的効果の測定を 心理尺度を用いて試みる 成果報告書

72206069 総合政策学部3年 友成隼也

背景

本研究の目的は、ガーナ共和国にて慶應義塾大学野球部員が*Baseballership education®を行うことによって、野球の技術向上を図るとともにガーナ人選手を対象に心理学において構築された諸理論に基づく尺度を用いた調査を行い、各種心理特性を明らかにすることであった。本研究により、野球が人材育成に繋がる具体的なエビデンスの収集が可能となり、野球競技の社会的価値を日本もとより世界に示すことが期待される。

*野球を通して野球の技術的な指導だけでなく、場を清め、時を守り、礼儀を重んじるといった「規律・尊重・正義」を身につけることができる教育を「Baseballership education®」と定義する

概要

対象者：ガーナ野球ソフトボール連盟所属のガーナ人コーチ、ガーナ国3州（Greater Accra, Central, Eastern）のベースボールクラブに所属する小学生、中学生、高校生118名（年齢入れる、年数）

実施時期：ワークショップ2024年8月9日～8月12日、4チームに分かれてベースボーラーシップを用いた実践的指導8月13日～8月29日、ガーナ甲子園8月31日、9月1、1回目は8月13日、2回目は8月29日

収集した尺度：Ten Item Personality Inventory (TIPI), Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale (PABSS), 12-item Grit Scale, Growth Mindset Scale, WHO-5 Well-Being Index, PERMA-Profilier, Group Environment Questionnaire(GEQ), Life Skills Scale for Sport(LSSS)

本研究は、慶應義塾大学SFC倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号：559）

実験結果

今回の効果測定においては、Growth Mindset Scale, WHO-5 Well-Being Index, Group Environment Questionnaire(GEQ)において有意な差が認められた。

各尺度の概要は以下の通りである。

【Mindset】低い方が「努力すれば自分の能力は成長する」という信念を示す
(今回はスポーツにおける自分の能力に関しての項目に変更)

【Well-being】低い方が精神的幸福度があることを示す

【GEQ】

多側面から構成される集団凝集性を示す

・ATG-T（集団の課題に対する個人的魅力）

例)このチームは自分のパフォーマンスを伸ばす機会を十分に与えてくれている。

・ATG-S（集団の社会的側面に対する個人的魅力）

例)このチームでの活動は自分が所属している集団の中でも最も大切な集団のひとつである。

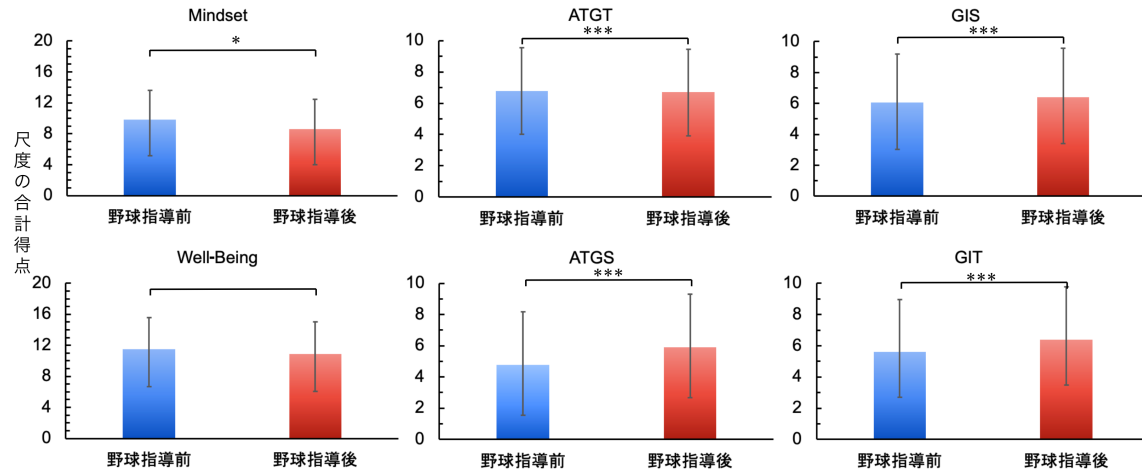
・GI-T（集団の課題に対する一体感への個人的評価）

例)われわれのチームは一致団結して目標を達成しようとしている。

・GI-S（集団の社会的側面に対する一体感への個人的評価）

例)われわれのチームは、シーズンオフの時でもチームのメンバーと一緒に過ごしたいと思っている。

*** $p < .001$, * $p < .05$



Growth Mindset Scale, WHO-5 Well-Being Index, Group Environment Questionnaire (GEQ)

考察

本研究により、野球を通じた教育が人材育成に与える影響、特に人生にとって必要となる心的資質に対する効果を具体的なエビデンスとして示すことが可能となり、野球競技の社会的価値を日本のみならず世界に対して示すことが期待できた。その中でもMindsetが向上したことから、野球を通して目標を達成するために練習することで目標に向かって努力することの喜びを感じることができるようになったと考えられる。また、Well-beingが向上したことから、キャッチボールや試合前に整列をして挨拶をする経験などによって、相手を思いやる行動をすることが増え、精神的幸福度を高めたと考えられる。最後に、GEQの向上が見られたことから、野球のチームプレーで組織で行動することが増えたことによって、組織に対する責任感や貢献意欲が高まったことに加え、組織全体の協調性が高まったと考えられる。以上のことから、野球を学び、プレーすることによって非認知スキルの向上を図ることができることが証明された。また、野球が言語の代わりとなり、国境や人種を超えた繋がりを形成することが可能と考えられる。予備実験を通して、野球経験者は野球によって非認知スキルが向上すると考えたが、この実験を通して野球が与える「チームで目標を達成すること」が非認知スキルの向上に影響を与えているのではないかと考えることができる。

今後の展望

本研究のベースとなる慶應義塾大学野球部員のガーナ共和国への派遣プロジェクトは2026年度まで継続されることが決まっている。そのため、本研究もプロジェクトに付随して継続調査をする予定である。今回の調査は初年度であったこともあり、現地の子どもたちがアンケート調査に慣れておらず、言語的な問題も相まって、本心とは異なった回答になっていた可能性が浮き彫りになった。ガーナは英語を公用語としていないながらも、各地域ごとで異なる言語を母語とする人々が存在し、調査対象だった中高生の多くは英語がまだ不自由な段階であった。そのため、来年度以降は現地の大学機関と協力し、尺度の再選定をすると同時に、現地の言葉でのサポートを念頭に準備していきたい。

謝辞

本研究を実施するにあたって、資金面でサポートしてくださった慶應SFC学会様に深く感謝申し上げます。